

第3回砺波市立学校のあり方検討委員会 議事録（概要）

- 1 開催日時 令和3年2月2日（火） 午後2時15分～午後5時15分
- 2 開催場所 砺波市役所 東別館会議室、庄川中学校、出町中学校
- 3 出席委員の氏名（50音順 敬称略）
安念 匠太郎、飯田 哲弘、 井上 五三男、金平 正、 久保田 晃克、笹田 茂樹、
竹山 美紀、 西島 健史、 林 誠、 樋掛 恵美、 藤井 法子、 藪 道子、
吉田 直人
- 4 欠席委員の氏名（50音順 敬称略）
なし
- 5 事務局の氏名
山本 仁史（教育長）、 構 富士雄（事務局長）、 河合 実（教育総務課長）、
岩滝 修二（教育総務課主幹）、 三部 修嗣（教育総務課庶務係長）
片山 智遥（教育総務課主事）

6 委員会次第

- | |
|----------------|
| 1 開会 |
| 2 委員長あいさつ |
| 3 日程説明 |
| 4 庄川中学校視察 |
| 5 出町中学校視察 |
| 6 議事 |
| （1） 学校視察内容について |
| （2） その他 |
| 7 閉会 |

7 委員会の要旨

- | | |
|--------------|---|
| 委員長 | <委員長あいさつ>
本日は、お集まりいただきありがとうございます。天気が優れませんが、これから数時間一緒によろしく願いいたします。 |
| 教育総務課長 | <日程の説明>
<庄川中学校視察> |
| 庄川中学校長
委員 | <庄川中学校の説明>
子供の減少問題なので、人口減少は先生方の力だけではどうにもならないということが分かった。
部活動の面で、切磋琢磨していく一つの方法として、庄川中学校の隣接に小規模校の般若中学校がある。般若中学校と庄川中学校で連合チームをつくり、活動をした
り試合に出たりすれば、部活動の適正という面でもいいのではないかと。可能かどうか分からないが、そういった働きをしてみてもどうか。 |
| 庄川中学校長 | 砺波市の四つの中学校の中には、ある部とない部がある。砺波地区の中で、例えば |

ソフトボール部が、他校のソフトボール部と組んで試合に出たことも実際にある。そのほかにも、今はコロナでなかなか行き来ができないが、練習試合や合同練習などの工夫はさせていただいている。

委員 数学の授業で、基本コースと標準コースに分かれていたが、コースを選ぶのは学校サイドなのか子どもサイドなのか。

庄川中学校長 コースは、最初は奇数偶数などで分かれていた。子供たちの、こっちの教室で学びたい、もっとゆっくり学びたい、もっともっと先生に質問したいという思いから、子供たち自身がコースを選んでいる。しかし、固定ではなく、何時間か経ったあとに、標準コースに行くということもできるようにしている。

委員 専門の免許を持った人でないと授業をできないのだろうかけれども、数学は2人いるということか。そうならば、人数が足りない学校では、少人数授業の取組はできないということか。

庄川中学校長 本校では、たまたま数学の教員が2名いて少人数授業ができています。そうでなければ、例えばチームティーチングという一つの教室に2人の教員がいるという形を取ることもある。本校も、教員数が足りなくなってしまうため、全てのクラスを少人数でやっているわけではない。1年生は本日見たように少人数授業でやっているが、2年、3年になると、数学の教員ともう1人教員が入って、補助的なことをするというようなチームティーチングの授業を行っている。

委員 般若中学校もそうだが、庄川中学校と般若中学校は、小学校から中学校に持ち上がっている。出町中学校と庄西中学校は、複数の小学校が合わさった形になっている。このような状況から、庄川中学校で意識していることがあったら教えて欲しい。

庄川中学校長 庄川小学校で、温かい、安心できる集団をつくっていただいております。中学校には子供たち自身がそれぞれの苦手や不得意なところを知った状態で入ってくるようになります。初めて会う教員よりも、子供たちがそっと手を差し伸べる場面は多々ある。しかし、中には「中学校に入ったら変わりたい」という子もいます。それにも対応しないといけないので、中学校としては、小学校とは違うということ、教科担任制になるし生徒会の活動や部活動もはじまる、リスタートできるような環境を準備しているつもりです。そのままというよりは、ここで1回リセットしてリスタートだという感覚で、新1年生を迎えています。

委員 技術と家庭科の専門の先生がいないということを知りましたが、それらの教科も何十時間か授業をしないといけないということになっているので、他の学校から応援に出すとか、そういったことはできないか。

教育長 できない。それぞれの学校にはそれぞれの学校の定数というか、国・県の基準に従って何人となっている。おっしゃっているのは、二つの学校を掛け持ちできないかということだと思うが、これは実際にやれないことはない。実際に、かつてやっていたところもあった。ただし、2校を掛け持ちするというのは、教員にとって非常に負担が大きすぎるのと、その教員は、自分がいったいどちらの人間なのかという心理的なストレスがある。例えば、卒業式はどちらに出るのか。去年はこちらだったから今年はあちらか、というふうになると、色んな形でうまくできない。掛け持ちはできないが、般若中学校くらいまで小さくなってしまうと、教科については県の方で非常勤を派遣するということがある。ただし、非常勤の先生を確保するのは至難の業で、家庭科の非常勤の先生をやらせてもらおうとしても人がいないという実態もある。

この基準は、数十年前に決められた基準であり、その頃にはこんなに子供たちが少なくなるということを想定していない基準。山のように子供たちがいた時代の基準

が、今も適用されている。

あまり強く「人を欲しい」と言うと、「だったらなぜ統合しないのか」と言われてしまうということも想定され、なかなか難しい。

委員 それは分かるが、子供たちにとっては、全く同じものを受けられないということが問題ではないか。

教育長 うまいことやろうと知恵を出して取り組んでいるが、子供の減り方が急すぎて、追いつかないところがある。砺波市は比較的安定していたのだが、いよいよ減少ということがはっきり見えてきた。

出町中学校長 <出町中学校の説明>

委員 部活動は何時までか。

出町中学校長 現在、生徒の下校時刻は5時15分。だいたい4時から5時までの1時間活動している。2月下旬になると、部活動の時間は15分伸び、5時15分まで活動し、5時30分に下校するという形になる。

委員 何曜日に活動しているか。

出町中学校長 毎週月曜日は部活動のない日となっており、土日は大会等がある場合を除き、いずれか片方は休みとなっている。

委員 4時から5時の部活動の時間というのは、先生が対応する時間か。

出町中学校長 そのとおり。

委員 それ以外で、校外などでも活動しているか。

出町中学校長 部活動としてはそれで終了していて、中には社会体育の活動として砺波体育センターなどで活動しているところもある。

委員 それは学校部活動とは違うということか。

出町中学校長 そのとおり。

<出町中学校視察>

委員 庄川中学校で授業をいくつかに分けて実施していたが、出町中学校でもやっているか。また、庄川中学校は数学だけだったが、そのほかの教科についてはどうか。

出町中学校長 その年によって異なるが、県から少人数指導の教員が配置されたときは、一つの教室を二つに分けたり、二つの教室を三つに分けて少人数指導を行うことがある。配置される教員の教科にもよるが、よく行っているのは数学や英語。教員配置と連動するのでいつもこのとおりでは言えないが、配置の状況を踏まえ、できる限り少人数授業の有効な部分を生かして取り組んでいる。

委員 最近の社会の流れから、働き方改革が叫ばれている。学校現場も同じことが言えると思うが、先生方にとって部活動というのは負担になるような気がする。先生方には、これからも楽しくやっていけるのであれば続けていただきたいが、学校として留意したい、留意して欲しいことはあるか。

出町中学校長 学校の時間外勤務をどう減らすかというのは喫緊の課題になっており、特に中学校の部活動にかかる時間が大きなウェイトを占めている。土曜日、日曜日に活動した場合、半日活动すると4時間くらいかかる。大会等で1日かかると8時間くらいになる。大会等がある場合は子供たちも先生も大会を目指して取り組んでいるので、そこに時間をかけるのは仕方がないが、逆に、そうでない時期にはしっかり休み、メリハリのある活動をすることが大事だと考えている。これまでは1年中オンシーズンという意識が強く、絶対に休んではだめだという意識もあったが、それでは時間数の削減にならないので、メリハリをつけ、集中してやるときはやり、休めるときにはきっちり休むというようにしないと、なかなか休みを確保できない。

教職員が担当する部活動については、自分の経験のある競技等を部活動で指導している割合はそれほど高くない。全然経験のないことを部活動として担当することの方が多いのが現実。また、教員によっては、自分の子供がまだ小さくてそちらに手がかかり、土日はなかなか活動ができないというケースもある。様々な家庭環境を持つ教職員がいるため、全体で何とかバランスを取って、無理のないよう配慮しながら活動を進めている。

<議事(1) 学校視察内容について>

- 議長 今回は、庄川中学校と出町中学校を視察した。前は小学校の視察をし、小学校と中学校では、教科担任制や部活動指導などの違いがあることが分かった。また、小規模校と適正規模校の違いや問題など、実際にご覧になって感じたことについて話していただきたい。
- 委員 孫が庄西中学校で卓球部に所属している。学校の部活のほかに、個人参加するトライズというものがある。出町中学校にもこのようなものはあるか。
- 出町中学校長 社会体育の活動が行われているのは、バスケットボール男女、バドミントン、バレーボール女子、卓球男女。そのほか活発ではないけれども活動しているものもある。野球は週に1回、保護者会の皆さんがお世話されて、夜グラウンドで活動していたりということはある。一部の部活動について、社会体育の活動に参加しているところもあるが、そこには教員は関わらず、完全に切り離した形の活動になっている。
- 議長 先生にとって、部活動の負担が中学校と小学校の大きな違いだと思う。
- 委員 庄川中学校で「地域の資源や歴史を学ぶ」という「ふるさと委員会」というものをさせていただいている。そういった地域を限定した活動を出町中学校はしているか。また、出町中学校は4つの小学校区が一つになるという点で、連携の取りにくさなどはあるか。
- 出町中学校長 日常的に地域の団体等と一緒に何かをやっているということはない。また、四つの小学校区、自治振興会の単位で言えば更に細かく分かれるが、どこともしっかりと連絡を取り合っている。例えば、地区民運動会があるが、その日には部活動は一切やらないことにし、中学生が地区民運動会に参加するとともに、運営などの面でも関わることができるように取り組んでいる。
- 議長 そのほか、色々な地域の行事があったときには、そこに中学生として何かできることはないかと、ボランティア活動に取り組んだりということもある。
- 委員 「ふるさと委員会」は、小学校と中学校の両方でやっているのか。
- 議長 そのとおり。地域の子どもたちを地域で育てて、大きくなったら地域に帰ってきてもらえるように、ふるさとを認識し、大きくなったら発信するように、また愛着をもってもらうという取組。
- 議長 庄川のように小学校区と中学校区が重なっていればやりやすい。出町中学校のようにいくつかの小学校が集まってくると、分散してしまうことがある。小学校はかなり地元密着型の学校が多いが、中学になるとそうでないところも出てくる。
- 委員 部活動について、特別にコロナ対策はやっているか。太田体育館で庄西中学校がクラブ活動をしている。バスケットボールやテニス、バレーボールなど、色々な部が使うため消毒液なども準備しているが、あまり減っていない。学校ではどのような指導をされているのか。
- 出町中学校長 手や指の消毒については、学校では液体石鹸を使った手洗いを進めている。アルコール消毒液がなかなか手に入らなかった時期もあり、出町中学校は比較的洗面所

があるので、6月に学校が再開された頃から液体石鹸を使って20秒は手を洗おうということを徹底した。

部活動での配慮事項について、今日、視察いただいた時に女子バレーボール部が更衣室から出てくるのが遅かったと思う。特に女子の部活動は、通常であれば一つの更衣室で着替えるが、今それができず、密を避けるため更衣室を分散させていることもあり、着替えに少し時間がかかる状況がある。また、吹奏楽部は、教室で活動してたがそれぞれが離れて活動している。合唱部は、マスクをしたまま距離を取って歌っているという状況である。

今の時期だと、屋外の部活動は外で活動できないため中に入って活動するが、ご覧いただいたように、廊下、階段、体育館やピロティなどをフルに使っている。それでも入らないときは、「今日は活動なし」ということも起こりうる状況である。

密を発生させないように、特に気にかけているのは着替えの時。あるいは、活動時はマスクを外していたりするが、活動終了後にマスクを外したままで着替えたり、そのまま玄関を出て行くということがないように配慮している。

委員
議長

部活動時の感染対策を確認したもの。これからも気をつけて活動いただきたい。

出町中学校への質問が続いているが、庄川中学校と比べて、両者を見てどのようなご意見やご感想を持たれたか。

委員

今回は、庄川中学校と出町中学校ということで、小規模校と適正規模校を見せてもらった。百聞は一見にしかずということで、本当にわかりやすかった。

充実した出町中学校の環境を見せていただき、校長先生は自信を持って見ていただきたいのだらうなという気持を自分なりに感じている。このような規模の学校をコントロールされるのは大変だと思うが、教員も生徒も明るい雰囲気が見て取れたので、やはり適正な形なのかなと感じた。

庄川中学校に関しては、悩み多きことがたくさんあるのだらうと感じた。一つは、技術の専任の先生でない方が技術を教えていたりとか、そういう意味では、先生も困惑しながら色々な対応をされているなど感じた。

部活動は、出町中学校を見せてもらったが、部の数が非常に多く、人数も多いということで、選手として大会に出場できない生徒もいるのだらうと思った。庄川中学校は、出場したくなくても出なければならぬというような環境もあると思う。中間くらいにならないのかと思いながら見ていた。

出町中学校長に、今の出町中学校の環境と庄川中学校の環境を考えると、どのくらいのところか適正の下限值なのか、規模感をお聞きしたい。

出町中学校長

まず人数的な部分で言うと、砺波市では般若中学校が100人くらい、庄川中学校が150人くらいで、本校が670人くらい。中間くらいだとほどほどかという思いが出てくるが、実は教員の配置数には基準があり、それに照らすと、ほどほどの数だと逆に少し中途半端である。例えば、数学の教員が2人では足りないけれど、3人では余るというようなケースも出てきて、どれくらいまでの生徒数であれば大丈夫だということは一概には言えない。

また、現在の本校の部活動の数に対しての現在の教員数なので、部活動の数を残しつつ子どもの数が減るとなると、逆に成り立たない部分も出てきてしまう。どれくらいまで減っても大丈夫かというのを、数的にお話するのは難しい面がある。

国が適正規模の学校を12学級から18学級としているが、中学校で12学級というのは1学年4クラス、18学級は6クラスなので、確かに1学年に4学級から6学級だとある程度の部活動を維持できて、一方全ての教科の教員がそろってということになるのは確かだと思う。

- 委員 先ほどメリットとして挙げられた、中学校に入ったときに生徒がチェンジできるというところについて非常に興味深く聞かせていただいた。それは色々な小学校から集まってくるというタイミングとか、クラス編成ができるというタイミングを指していると思うが、中学校として極めて大事な要素だと感じている部分をお聞きしたい。
- 出町中学校長 新しい自分になれることについては、まずは入学する段階で全然自分のことを知らない人たちと出会う、全く新しい自分を見てもらえるというのが一番大きな部分で、まずは入学時、そして、クラス替えが2年になるときと3年になるときにあり、本校は6クラスあるので、クラスが違うとほとんど話したことのない人もたくさんおり、クラス替えの時にも変われるチャンスである。小学校の先生が「小学校の時、あの子がそういう活動するとは思わなかった」と、中学校に入って俄然に一生懸命活動する姿が見られることもあり、それは、いくつもの学校から集まってくるメリットである。
- 委員 教育委員会に聞きたいが、小学校3年生から6年生までを35人学級にするということが閣議決定されたとあった。そうすると、これまでいただいた資料の中で、変更があるのかどうか知りたい。
- 教育長 35人学級について閣議決定されたのは、今は1年生だけだが、今度は2年生に持っていこうという話。これに該当し、35人学級になったら教室が足りないというのは、都会のある一部の地区で起きうる話ではあるが、砺波市においては、40人を35人にしてもらっても、足りる学校が多い。
なお、2年生については、県はすでに35人学級をやっており、国は後追いの形。だから、あまり変化はないというのが実情で、時々該当する学年があるかもしれないという程度である。
また、今は小学校3年生も35人学級になっているが、3年生以上は35人学級を二つに分けてもいいし、一つのままでもいい。学校によって決めていいという仕組みになっている。国の方は、多分現状でそれだけ子どもの数が減ってきたから言い出したのかなと疑ってしまうようなところがある。富山県はそうだが、他県に行くとまた変わる。県独自で、例えば全部の学年を35人学級にしたりとか、中には30人学級でやっている県もある。県によって決まっている。
- 委員 中学校に入って自分を変えられるということに関して、1学年に二つのクラスがないとなかなかクラス替えができない状態になる。そういった意識を考えるべきなのかどうか、シャッフルができるということにはいい面と悪い面があるような気がするが、そのことについて教えてもらいたい。
- 教育長 庄川中学校長と出町中学校長は、相反することを言っている。みんなが一緒に小学校から上がってくるから、みんなのことがよく分かっているというのも一理ある。でも、みんなのことが分からないからいいと出町中学校長は言っている。これも一理ある。どちらにも利があれば、まずいところもある。ただ、それをきめ細かく、どちらがいいのかということを見ていかないと、どちらがいいのか悪いのかという結論はなかなか出しにくい。
特に小学校の場合で言うと、今の子どもたちのコミュニケーション能力は、かつてよりかなり衰えていると思っている。なかなかうまく子供同士で付き合えない。自己主張はするけれども、相手と折り合いがつかない。そうなることじれる。こじれるのはいいが、学校の中でとどまればいいのだが、今度は親同士のトラブルに発展するケースが最近とても多い。単独学級からずっと上がっていくと、冷却期間が持たず、学級運営などに苦労する場面が出てくる。したがって、小学校であれば、2

クラス以上あればまずは引き離し、2、3年離れた後で様子を見るという取組ができるが、これが一つの学級しかないとなるとかなり苦しいということになる。

それから、中学校でもやはり同様のことが起きる。小学校からそのまま上がるにしても、せめてそこでは複数の学級があって欲しい。クラスが2クラスしかないと行ったり来たりしかできないが、それが3クラス以上あれば良い。3クラスというのは中学校では一つ決め手になるクラス数である。というのは、3クラスあれば何とか全部の教科の先生がそろそろ可能性が出てくる。4クラスになれば、ほぼ間違いなくそろそろ。そういう意味では、中学校では3クラス、4クラスというのは、ポイントになる。それと同時に、4クラスあるということは、1学年に120～130人いるということであり、部活動もある程度の数ができる人数となり、指導者も配置できる人数になる。

これからの議論はそういったところにも踏み込んで皆さんのご意見をお聞きすることになると思うが、「どちらがいいか」と聞かれると、そういうことなんですとしか言いようがない。じゃあ1学年1クラスの子どもたちが不幸かと言われれば、ある一面ではかわいそうであるし、したくてそうなっているわけではないので、その子供たちにはその子供たち用の手立てをしていかなければならない。ただ、どのくらいまで少なくともいいのかというのは、本当に吟味していかなければならないことだと思う。

委員 国の教師の数の基準について聞きたいのだが、それは国が、この規模だからこの基準をベースに補助金を出すというもの。庄川中学校で教員が足りないという部分を見て、子供たちがそのような問題に直面しているのなら、その予算的なところが国からもらえないのであれば、県や市で予算をつけていち早くその問題に対応すべきではないかと思うが、そこについてはどうか。

事務局長 人はいるが、教科担任制であるから、そこに充てる専門の人材が確保できず、配置ができない。

議長 教員の配置にあたっては、教員定数というのが決まっていて、主要教科から充てていくと技術や家庭科を教える先生が配置できなくなるという感じ。

委員 それは規則でそうなっているのか。

議長 そのとおり。そこで専任の先生を雇うとなると、県が認めれば県のお金でできるが、認めてもらえないと砺波市が給料を全額払わなければならない。ただ、先ほど事務局長から説明があったように、なかなか先生のなり手がいない状況。非常勤としてきてくれる人材がいない。

委員 理解した。

委員 今回の件に関して、県が学校規模に応じて、教員の数を決めるのか。

教育長 国の基準はあるが、最終的な基準は県が決める。まず人数が配当される。その配当される人数でどの教科を選ぶかというのは、市教委や学校で考える。教科を選ぶときの主になる考え方については、教科によって、決められた時間数があり、5教科と言われる国、数、英、理、社は1週間あたりの授業数が多いため、当然その先生は必要。ところが、美術や家庭科になると、1週間に1時間あるかないかという状態。そのような場合、配置できる人数が決まっていて、どの教科を選ぶかとなると、市や学校としては時間数の多い教科を選んでいかざるを得ないという実態がある。もう一つは、椅子はあるけれども座ってくれる人がいない。つまり、教員養成がなされていないという実態もあるし、元々の教員志望者が減っているという面もある。小学校の場合はあまり教科は関係ないが、中学校は教科でしか採用されないの、なかなか確保が難しい。このへんのところを皆さんに分かっていただける資料を、

次回に準備させていただきたい。分かりにくいところだが、なかなか規模というところにはつながっていかないというのも事実。今までこういうところは表に出さなかったが、子供の数が減り、先生の数も減ってくると、背に腹は代えられないという状況がある。

事務局

<議事(2) その他 説明>

※事務局より、次回の第4回委員会は令和3年度に行う事を確認した。

教育長

<閉会あいさつ>

お忙しい中、ありがとうございました。今までこうした形で学校を見ていただくことはございませんでした。学校現場についてを演劇で例えるなら、今までは演じている場面は見てもらっていましたが、このあり方検討委員会では、その舞台裏がどうなっているかというところを取り上げていただいているような気がしております。しかし、舞台裏を見ていただかないと、こうだという答えにつながらないと思っております。

これからも、これはどうなっているのかということがあれば、我々が資料を準備させていただきますので、今後の審議に役立てていただければ幸いです。本日はどうもありがとうございました。